

## 令和の時代に求められる避難対策

(一財) 消防防災科学センター 黒田 洋司

### 1 平成の時代：大きく変化した災害時の市町村への期待

平成の時代を振り返ると、災害時の市町村に期待される内容は、幾多の災害の教訓、インターネットを核とする技術革新、そして災害情報の進化などを背景に大きく変化しました。特に、風水害では、災害が起きた後の事後対応に止まらず、災害が起きる前の住民の命を守るための警戒避難対応により大きな期待が寄せられるようになっていきます。

この間、市町村の避難対策に役立つよう、土砂災害警戒情報、危険度分布、警戒レベル等さまざまな災害情報が生み出され、これらの情報はインターネットを通じて瞬時に入手できるようになりました。また、防災メール、緊急速報メール、SNS など一人ひとりに情報を伝達するツールも誕生し、現場との情報のやり取りの場面ではスマートフォンや携帯電話といった日常的なツールが手軽に活用されるようになりました。今、市町村には、こうした災害情報や情報ツールを最大限に生かして、効果的な避難対策を実現することが期待されています。

### 2 大失敗を減らすための対応の自動化：「空振り」から「素振り」へ

では、効果的な避難対策を実現していく上で、どのような心構えが求められるのでしょうか。私は、風水害の警戒段階では、その時その時で体制や対策を判断していくよりも、対応をある程度自動化することで、「大失敗」（避難指示などを出せなかったり、出し遅れたりすることによる人命の損失）を減らすことができると考えています。つまり、避難指示などを出す客観的な基準をあらかじめ明確に決めておき、その基準に達したら「総合的に判断して」ではなく、「自動的に」それを実行するということです。

当然、この方法は「空振り」が多くなります。土砂災害警戒情報をはじめとする災害情報の鉄則は見逃しを避けることであり、必然的に安全側に立って発表されるからです。しかし「空振り」を過度に恐れては失敗を招きやすくなります。岩手県釜石市に、「100回逃げて、100回来なくても101回目も必ず逃げて！」という中学生の言葉が刻まれた津波記憶石があります。災害対応についても同じことが言えるのではないのでしょうか。対住民では「オオカミ少年」も懸念されますが、行政は違います。京都大学の矢守克也教授は「「空振り」改め「素振り」と語っています。発想を転換し、「素振り」を厭うことなく積み重ねることが、「大失敗」を減らす基本的な心構えではないのでしょうか。



昭和60年3月北海道大学大学院環境科学研究科環境計画学専攻(修士課程)修了、昭和60年4月宮崎県庁入庁、平成3年4月財団法人 消防科学総合センター入所、平成26年4月同センター研究開発部長兼統括研究員、平成28年4月一般財団法人 消防防災科学センター(名称変更)、10月日本大学危機管理学部非常勤講師～、消防庁「自主防災組織等の地域防災の人材育成に関する検討会」委員(-令和元年度)、市町村アカデミー「災害に強い地域づくりと危機管理」講師(令和2年度)、全国市町村国際文化研修所「政策・実務研修「災害発生時のマネジメント～対策本部の運営～」」講師(令和元年度)